

海外研修に参加して

長尾 明香

Haruka Nagao

NHO 旭川医療センター 地域医療連携室

「人の幸せとは何か」「戦争はなぜするのだろうか」5日間の海外研修で考えさせられたことでした。

2015年5月18日～22日、管理栄養士の高橋さん、看護師の千葉さんに続いて今年度最後の出発でした。昨年参加された職員の方や事前に行かれたお二人から事前情報をいただいていたので、抱いていた不安は少し軽減されましたが、ソーシャルワーカー（以下SW）としては初めてなので、どんな研修になるのか、特に面接などコミュニケーションを主体とするSWは、英語力が乏しい私としてはとても不安でした。

ロサンゼルス空港に到着すると、コーディネーターの奥津さんと現地在住の弟が迎えに来てくれていたので、すぐに緊張から開放されました。研修が始まる前日、弟にはビーチシティや市内を案内してもらったおかげで、現地の雰囲気にすぐに溶け込むことができました。

私の滞在期間はメモリアルウィークエンドの週であり、5月の最終月曜日がメモリアルデー（戦没将兵追悼記念日）といって兵役中に亡くなった兵士の追悼する日にあたっていました。町中に国旗が飾られ、「FREEDOM ISN'T FREE」というスローガンがかかげられていました。このあと、このことについて深く考えさせられることは知らず、スローガンを写真に収め、研修を迎えることになりました。

滞在中は天気にも恵まれ、カルフォルニアらしい青空と太陽の日差し、開放感あふれる雰囲気の中に身を置きながらも、研修では緊張と衝撃の連続でした。夜中の戦闘機の音に敏感となり、ただの旅行で来ていたら、気にも留めていなかったと思います。2日目の夜は時差ボケも手伝ってか、カルチャーショックもあり眠れませんでした。

そもそも私が研修させていただいたVA Los Angeles West Medical Centerは、退役軍人病院であり、私が出会った患者さんたちは、戦争がひとつの引き金となり、PTSD（心的外傷後ストレス障害）、薬物依存、アルコール依存、経済的困窮、ホームレスなど様々な問題やつらさを抱えた方々でした。ベトナム戦争やイラク戦争を経験された方が戦争をきっかけにつらい身体・精神症状と向き合いながら、家族との関係、子育てのことなどごくごく当たり前の日常生活と向き合っている姿をうかがうことができました。

VAの敷地内には病院をはじめ、精神科外来、ホームレス専用の外来、社会復帰施設、ナーシングホームなど多くの施設があり、総勢300名程のSWが働いています。VAのSWは、生活の保障、自立や社会復帰、終末期（緩和ケア）までそれぞれの部門に配属され、患者の支援に携わっており、国として生涯、軍人への手厚い支援や保障の体制が整っているという印象

長尾 明香 NHO 旭川医療センター 地域医療連携室

〒070-8644 北海道旭川市花咲町7丁目4048番地

Phone: 0166-51-3161, Fax: 0166-53-9184

E mail: h-nagao@asahikawa.hosp.go.jp

でした。

研修初日、SWのトップであるMs. Long氏の部屋に伺いました。病院の6階にあるLong氏のオフィスの大きな窓からは、サンタモニカの町並みと海、ダウンタウンにつながる道路とすばらしい景色が広がっていました。60代半ばのLong氏は、優しく包んでくれる母のような雰囲気と可愛らしい面を持ちあわせた方で、すぐに親近感が沸きました。日本から来た私を優しく暖かく迎えてくれ、日本語の話せるスタッフを呼ぶなど気を使ってくださいました。そして、主要なSWを集めると、どんな研修プログラムがいいかを考えてくださり、それぞれの部門に電話連絡し調整してくださいました。

私の研修は、とにかくたくさんの方の部門のSWにお会いし、話を伺うといったスタイルでした。院内の退院調整カンファレンスの参加、医師とのカンファレンス、患者との面接同席、循環器、透析、プライマリー、ドミトリー、社会復帰施設等のSWへのインタビュー、アルコールや薬物依存のグループミーティングの同席、在宅で生活されている方のデイサービスのモニタリングにも車で連れて行ってくださいました。

院内においても部門ごとに複数のSWが配置されており、患者が転科、転棟するとSWの担当も都度変わっていく体制でした。SWも部門によって特化していることで、ここまでは私の領域だがこれ以上は私の領域ではないと主張するSWもあり、体制による弊害もあるとのお話も伺いました。面接時に使用するア

セスメントシート、各種マニュアルは整備されており、SWの教育、管理についても整備されていました。

驚いたことの一つに、SWには1人1人個室が与えられており、特にスーパーバイザークラスになると、日本で例えると院長室のような応接セットもあるような広々としたオフィスで働いていることでした。若い方からこの道30年以上という年配のSWが生き生きと働いている姿が印象的でした。

「いくつになってもチャレンジできると私が証明しているでしょう!」と緩和ケアのSWのMr. Tom氏が話してくださいました。もともとは舞台俳優から舞台監督をされており、Tom氏の部屋には当時の写真が飾られておりました。舞台時代、俳優仲間がエイズで亡くなっていく姿をみて、緩和ケアのSWを目指したいと思ったそうです。50歳で大学に進学し、大学院を経て56歳でSWになり10年弱。その間に出会った患者さんのお話をしてくださいました。がんや筋萎縮性側索硬化症などの難病になり、緩和ケア病棟で過ごされる方が多く、戦争で自分たちが行ってきた行為について罪悪感を抱いているとのことでした。

戦争がなくなる限り、戦争の犠牲とも言える人々が減らないであろうし、根本の問題解決が進まなければ、同じことが繰り返されている現実もあります。そこに気づいているSWは患者の支援を通して、国の体制や政策へのジレンマを感じながら、現実と向き合っているというお話も伺いました。



人の幸せとは何か、戦争はなぜするのか、様々な思いをはせた5日間。戦争は遠い国で起きているものどこか他人事で過ごしていた私ですが、決して遠くない隣の国で起きていることを実感させられました。アメリカは自由の国という象徴ですが、「FREEDOM ISN'T FREE」というスローガンが掲げられているように、自由は犠牲の上に成り立っているということを改めて考えさせられる機会となりました。

とにかく、私が今回出会ったVAのSWは患者の背景は違えども、ソーシャルワークの基本姿勢は同じであることがとても嬉しく思いました。

海外研修を通して得た体験は今後のソーシャルワークの実践に役立てることが私の使命であり、そして未来を背負っていく子どもたちにも、親の責務として、研修で感じたこと、学んだことは伝えていきたいと思っています。

最後に、今回の研修に、この時期、このタイミングで行かせていただいたことは私の人生の中でとても重要な意味を持つのではと感じています。模範とすべき素晴らしいSWに出会えたこと、また、研修中、常時そばで支えてくださったコーディネーターの奥津さんにもとても感謝しています。快く送り出してくれた家族や研修参加の機会を与えてくださった前箭原院長をはじめ国立病院機構関係の方、受け入れて下さったVAの皆様改めて感謝申し上げます。